

稱讃 一三五号

二〇二二年七月一日発行

発行　浄土真宗本願寺派　稱讃寺
〒一二二―〇〇七五
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
TEL　〇三―五二四二―二〇二五
FAX　〇三―五二四二―二〇二六
HP　shousanji.com

かなしきかなや道俗の
良時・吉日えらばしめ
天神・地祇をあがめつつ
卜占祭祀つとめとす

うら、まつり、はらへ

『正像末和讃（悲歎述懐讃）』

『浄土真宗の教章（私の歩む道）』の「生活」には、「親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歓喜のうちに、現世祈祷などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。」と謳われております。



「法語カレンダー七月」　榎木孝明氏作

〝現世祈祷〟は一般的な言葉ではないようですが、『季刊せいてん』で藤丸智雄氏は、「神秘的な力にはたらきかけて、現世における利益を得ようとするもの」という意味で解説されておられ、また、〝祈祷〟には神仏との交歓の意もあるが、ここでは「現世」という言葉と併せて一つの熟語となっていることから「いのり求める」という古くからの意味で解釈しますと捉えておられます。

浄土真宗は、〝現世利益〟つまり「この世での幸せ」を否定しているわけではなく私利私欲のために、神仏に善行と言われる方法（念仏もその一つの方法）で頼み、その恩恵にあずかろうとする行為を批判しているのです。

現代社会において、繁栄しているところは、物であろうが、心であろうが、そのサービスの質にあり、Ｇｉｖｅ＆Ｔａｋｅの充実が求められているような気がします。

そういう意味から単に寺院の護持発展は〝現世利益〟の追求に止まってはいけないでしょう。知人のお寺の本堂には「真宗古法場」と掲げられています。「学仏大悲心」とは、〝仏教を学ぶとは、阿弥陀さまの大慈悲に出遇う〟ことと心得、お念仏申し、阿弥陀さまのお心を聞いていくことでお寺の護持発展に繋がるように、鋭意努力して参りたいと思います。

今後ともご賛同ご協力をお願い致します

中島隆信先生と語らう会



去る六月十一日（土）午後二時より、称讃寺にて中島隆信先生と語らう会」ということで、早崎さんと安達さんにご参加いただきました。

先生は以前『お寺の経済学』をご執筆なさっておられますが、その第二弾として、様々な宗教、日本の寺院神社では、「現世利益」が説かれており、寺院の存在意義並びに経営を成り立たせている現状にありながら、浄土真宗では、「現世利益」を説かずに今日まできているけど、浄土真宗のご門徒さんは「現世利益」について、本当はどう思っておられるかをお聴きしたいということでした。



早崎さんは、〝現世利益〟と言えるかわからないが、今の築地本願寺の経営に魅了します。「築地本願寺クラブ」に入会すれば、様々なサービスが受けられることが魅力であると。

安達さんは、母親らから、小さいときから「仏さまに、お願いするものではない」ことを聞かされてきたので、〝現世利益〟とか思いもしてこなかったと。

今後、お寺が存続・発展していくには、魅了するものがなければならないのかもしれません。

〝今、ここでの救い〟とは、ある意味では〝現世利益（現生利益？）〟なのかも知れません。

稱讃寺 永代経法要・歓喜会ご案内

例年、六月中に開催いたしております恒例法要の一つであります「永代経法要」を左記の通り、執り行います。

仏さまと成られた先人をそれぞれに偲ばせていただくなかで、その仏さまを通して、今、私がお念仏に出遇わさせていただいていることを共々に喜ばさせていただき、次代にお念仏を共に伝えていくことをあらためて誓う法要にいたしましょう。また、十六日は、のんのん法話会に兼ねて旧盆（歓喜会）を執り行いますので、こちらもご参拝ください。

記

〈永代経日時〉

七月一〇日（日）午後二時～

一四：〇〇　おつとめ

一四：四五　おはなし

一五：三〇　門信徒会（讃迎会）

一六：〇〇　恩徳讃・解散

※当日は、二〇二二年度「門信徒会費」の受付をいたします。

〈歓喜会日時〉

七月十六日（土）午後二時～

一四：〇〇　おつとめ

一四：四五　おはなし

一五：三〇　恩徳讃・解散

現世利益和讃について

八首目

南無阿弥陀仏をとなふれば（なもあみだぶつ）
難陀・跋難大竜等（なんだ　ばつなんだいりゅうとう）
無量の　竜神尊敬　し（むりょう　りゅうじんそんきょう）
よるひるつねにまもるなり

【意訳】
お念仏を称えると、
難陀・跋難などという名の大竜たち
数限りない竜神が水中から尊敬し、
夜も昼も、常にその念仏者を護るのである

【出拠】
『金光明経』巻三「鬼神品」第十三（あのくだつりゅうおう）
阿耨達龍王、・・・難陀龍王（なんだりゅうおう）、跋難龍王（ばつなんりゅうおう）、
是の如き等の百千の龍王あって、大神力（だいじんりき）を
以て常に来（きた）りて是の経を聴く者を擁護（ようご）して
昼夜離れず。
（『三帖和讃ノート浄土和讃篇』豊原太成師編著）

「神仏ネット」より抜粋

八大竜王は、八大竜王大神などのように龍神つまり水神として祀られ、雨を降らせるなどのご利益があることが見られます。この性格に加え、仏教世界では仏法の守護神として、仏様、仏教の教えを守護する神様でもあります。八大竜王については、法華経に表記が見られ、密教大辞典などで八大竜王の日本での信仰についての記述があります。

●仏教における八大竜王の意味

八大竜王は仏教世界では釈迦の眷属として描かれ、釈迦の生誕の際に、甘露を降らせてその生誕の祝福をしたという逸話も残っています。その後、釈迦が悟りを得て衆生に説法をするようになり、霊鷲山で法華経を説かれた際は、梵天等の天部の神や人々と共に、八大竜王もその説法を聞いたとされます。

●観音菩薩の守護神となり人々にご利益をもたらす

妙法蓮華経の観音経の中で、観音様を信仰すれば衆生を救い、願いを叶えてくれると言われています。八大竜王はその観音菩薩の守護神であり、観音様の宝珠を身に宿して人々に福をもたらし願いを叶えてくれると古来から信仰されてきました。福徳神としての龍神様の信仰の話では、平安時代の少し前、桓武天皇が皇太子時代に室生寺の龍穴神社にて桓武天皇の病気平癒の祈祷が行われたことが歴史書にも残されています。

●インドの竜王は中国や日本の姿とは違う

八大竜王は仏教が生まれたインド発祥の神様ですが、日本で思い浮かべるような、細長い体で空を舞うという姿では考えられていなかったようです。インドでは龍はＮａｇａ（ナーガ）と呼ばれ、半身半蛇の姿で、さらに蛇もコブラのような顔のあたりが広がる姿でした。八大竜王とは、それらの龍を束ねる族長という存在です。因みに八大竜王を含む龍衆は八部衆という釈迦如来を守護する神様として描かれますが、八部衆の中には、別の龍族である摩睺羅伽という存在もおられます。このように仏教においては八大竜王以外にもたくさんの龍がいると考えられています。

●八大竜王のご利益

八大竜王は様々なご利益をもたらしてくださるとして、八大竜王神を祀る神社には多くの人が参られますが、有名なご利益には次のものが挙げられます。

・商売繁盛・富貴栄達・出世・勝運・除災招福・恋愛成就・五穀豊穣など

八大竜王に限らず日本では龍神様の信仰がとても深いので、神社や寺院では他にもたくさんのご利益が解説されていると思います。

●八大竜王のご利益（水神）のエピソード

弘法大師として知られる空海は、桓武天皇に雨を降らせてほしいという願いを受けました。空海は祈願すると、神泉苑という御所内にあった庭の池から龍神が天へと上り雨を降らせたとされ、この伝説から今でも京都の神泉苑には八大竜王の沙伽羅竜王の娘の善女竜王社があります。

難陀竜王（ナーガ）ー歓喜の意を持ち、龍の意を持つサンスクリット語のナーガが由来の神様。神格が高く、龍王の中で最も優れた龍王とされています。

跋難陀竜王（ウパナンダ）ー賢喜・亜歓喜の意を持ち、難陀竜王の兄弟神として、難陀竜王と共にマガダ国（インドの古来あった国）を保護していた龍王とされます。

沙伽羅龍王（サーガラ）ー海の意を持ち、海底にある竜宮城に住む大海龍王ともされ、雨を降らせる法を持つ龍王です。摩訶止観という書の中では、沙伽羅竜王の雨を降らせる力によって大干ばつから救われたという逸話も残っています。印度無熱池に住し密教の守護神ともされます。沙伽羅竜王は日本では「龍女成仏」という仏教の逸話でも有名です。

龍女成仏とは、法華経提婆達多品の中の逸話で、釈迦の法華経の説法を聞いていた時、沙伽羅竜王の第三王女の「善女龍王」がその教えを聞いて成仏をしてしまったという話です。

また、沙伽羅竜王は牛頭天王と言う、今はスサノオノミコトと神仏習合する神様の伝説にも出てきます。牛頭天王の后としてもらう女性は、沙伽羅竜王の第三王女の頗梨采女（はりさいじょ）と言われます。牛頭天王は日本で生まれた神様とされますので、以下に八大竜王が日本の文化に融け込んでいたのかがわかるエピソードです。

和修吉竜王（ヴァースキ）ー宝、多頭の意で、日本では九頭の意味を持ちます。このことから、日本で古くから信仰されてきた九頭龍王、九頭龍大神（くずりゅうおおかみ）という神様と同一視されています。仏教の世界観では、世界の中心にある須弥山を守護する神様として描かれます。

徳叉迦竜王（タクシャカ）ー多下、毒視の意を持ち、和修吉竜王と同胞とされます。徳叉迦竜王が怒って凝視し眼があった人は息絶えるとされる神様です。しかし、恐れるような龍王ではなく衆生を惑わす悪鬼などの存在を食らう存在でもあります。その娘には、仏教の神様の中でも人気の吉祥天がいます。

阿那婆達多竜王（アナヴァタプタ）ー無熱・無悩清涼の意を持ち、ヒマラヤの北方の阿那婆達多（無熱池）に住んでいると考えられています。釈迦の誕生の時に甘露を振らせてその誕生を祝ったのが、阿那婆達多ともされ、とても慈悲深く菩薩さまの化身とされています。最も徳の高い竜王様ともされます。また、仏教界において、四つに分かれる人間の住む大陸を分ける四方に伸びた大河（東ガンジス・南インダス・西オクサス・北シーター）で大陸を潤しているとされます。

摩那斯竜王（マナスヴィン）ー大尉、高意、太刀、大身の意を持ち、慈悲深い竜王とされます。衆生に信仰心を芽生えさせるという大願を持つ神様です。また阿修羅が帝釈天の住まう喜見城を海水で攻めたときに、摩那斯竜王は身を躍らせて海水を戻したとされます。

優鉢羅（ウッパラカ）ー訳すと青蓮華、黛色蓮華池、青蓮華龍王。青蓮華を生ずる池に住まうという。インドでは花弁や葉などの形状を比喩的に眼を表わすことに用いるが、特に青睡蓮は美しい眼に喩えられる。仏教では仏陀の眼は紺青色とされ、三十二相八十種好の一つ「眼色如紺青相」となっている。「青蓮華」は、漢訳仏典で「優鉢華（ウハツケ）」、「優鉢羅華」などと音写される。中国で「青蓮宇（セイレンウ）」は仏教寺院の別称。また、仏教で「ウッパラ」といえば、「ウッパラヴァンナー」の故事が著名である。（ウィキペディアより抜粋）

多くの大乗仏典などでは、提婆達多が逆心を起こし仏を殺さんとして、これを彼女が呵責したので、提婆達多が怒って彼女を強殺し眼球が潰れて、ついに命終したと伝えられている。（ウィキペディアより抜粋）

『生命環流　浄土和讃を読む下』

大峯顯師著

竜神というのは、インドでも日本でも水と関係がある神のようです。難陀・跋難などの八大竜王、およびその部下の無量の竜神たちです。旱の時には見ずがありがたいですけれども、時には洪水などの水害も起こります。ですから、水も怖れられたのでしょう。これも圧倒的な自然の力のことを言っているのです。（前回のご和讃で「堅牢地祇」を大地の神々と捉え、自然災害における念仏者への利益を説いている）先の津波（二〇一一年東日本大震災）なども、竜神の中に入れることができるかもしれません。そういう怖ろしい竜王や竜神であっても、南無阿弥陀仏を称える人を尊敬して護ってくださるのです。自然の力というものも、他力の信心の世界の外にあるわけではありません。南無阿弥陀仏は、その怖ろしい自然の力が私たちを守護する力に転じられるという不思議のことです。

ここで、前回のご和讃についての大峯顯先生の解説をもう一度掲載いたします。

地殻の変動や津波は人間の想定を超えている出来事ですから、神々の仕業です。本居宣長の『古事記伝』によると、神という字は「迦微」と書くということですが、これは、人間が社に祀って尊崇する存在を意味するだけではなく、ぞっとするような怖ろしいものをも意味します。・・・・

プレートが動くというのも人間の想定を超えたことですから、普通はそれを否定的にとらえて、悪いもの、怖ろしいものとだけ考えます。しかし、生命というものは、初めから人間的知性の想定を超えた世界に根を下ろしているという明らかな厳然たる事実に思いをいたすことが、必要なのではないでしょうか。

親鸞聖人が念仏者は堅牢地祇に護られていると言われるのは、災害に巻き込まれないということなのではなく、巻き込まれても巻き込まれないという世界があるということです。なぜなら、巻き込まれるのは私の体であって、私そのものではないからです。仏さまを信じた私そのものとは私が思っている私ではなく、仏さまに思われている私のことです。私の体は、私の所有物ではありません。しばらくすると、自分のものと思っているこの体は、私の断りもなく私から離れてゆくのです。たいていの人は、自分の体が自分だと思い込んでいますが、そうではなく、私たちはしばらく体という着物を着ているだけで、着物は私のものではないのです。体はそのうち用をなさなくなるますが、仏さまから見られている私そのものは、阿弥陀さまの力によって仏になります。何も心配ないのです。

人間は体だけの存在ではなく、体でない心を持っていると素朴にいうとわかり易いかも知れません。これは誰もが認めることでしょう。・・・ところが、そんな大事な心はどうしたら得られるかと言ったら、それは阿弥陀さまの言われる言葉を聞くことによってです。信心は真実の心ですから、阿弥陀さまからいただいた心です。信心とは仏心だと、蓮如上人は言っておられます。先に蓮如上人が「たましゐ」という言葉を使って信心の心を表現しておられることを申しました。（本書一〇二頁）

〈本書一〇二頁抜粋文〉

蓮如上人は、文明三（一四七二）年八月十四日に次女の見玉尼が往生したことを記した『帖外御文章』の中に、「たましゐ」という言葉を使って、

蝶となりてうせぬとみゆるは、
そのたましゐ蝶となりて、
法性のそら極楽世界涅槃のみやこへ
まひりぬるといへるこころなり

と言っておられるのは、本願にまかせた見玉尼の信心の心のことです。親鸞聖人の表現で言えば、「信心のひとのこころ」のことです。いわゆる霊魂不滅のことではありません。

本当の心であるからには、私たち凡夫が考える不滅の霊魂などではなく、まったく仏さまの心です。信心は仏心であって、梵心ではないのです。ところが仏法を正しく聞かない人は、信心とは修行した人間の心だと思っているのです。しかし心というものは、人間が手を加えれば加えるだけ、かえってだめになっていきます。人間が苦心して自分で作るものではなく、阿弥陀さまの心をいただくことが信心です。ですから、阿弥陀さまが死なないのと同じように、信心をいただいた人もやはり死ななくなるのです。「大信心は仏性なり」と親鸞聖人がおっしゃるとおりです。

親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年　慶讃法要 企画

親鸞聖人を知ろう

覚如はなぜ『親鸞伝絵』に「親鸞は伯父範綱に連れられ慈円の下で出家した」と書きこんだのでしょうか。原文は次のようになっています

聖人の俗姓は藤原氏天児屋根尊二十一世の苗裔（中略）皇太后宮大進有範の子也。（中略）九歳の春比（はるころ）阿伯従三位範綱卿【于時、従四位上前若狭守、後白河上皇の近臣、聖人養父】前大僧正【慈円慈鎮和尚是也。法性寺殿の御息、月輪殿は長兄】の貴坊へ相具したてまつりて、剃髪を剃除したまひき。範宴少納言公と号す。

文中、「苗裔」は「子孫」／「阿伯」は「伯父さん」／「法性寺殿」は「藤原忠通」／「月輪殿」は「九条兼実」／「範宴少納言公」は寺院の中での通称です。この通称のことを、「公名（きみな）」と言いました。この公名は俗人の太郎・次郎といった仮名（けみょう）に相当します。

では、慈円の政治的立場はどうだったでしょうか。

慈円はこの時、右大臣であった九条兼実が最も頼りにした同母弟です。兼実の父忠通は十人の息子のうち三人に家を継いで摂政・関白になる資格を与えました。近衛基実・松殿基房・九条兼実の三人です。いずれも異母の兄弟です（ただし、基実の母と基房の母は姉妹）。基実と息子基通、基房には摂政と関白がまわってきましたが、兼実は当時の権力者平清盛との関係が悪く、十五年間右大臣のままでした。焦った兼実は息子良通の妻に清盛の外孫の娘を迎えるなどして、清盛に接近を図っていました。

親鸞の父有範も、親鸞に先立って出家したと考えられます。その理由は政治的失敗であろう前年の治承四年（一一八〇）の以仁王の乱に始まる、平清盛打倒の企てに参加して失敗し責任を取らされたのであろうとされてきました。そういうことなら、慈円が戒師になってくれる可能性は薄いでしょう。

では、親鸞の伯父の日野範綱と日野宗業について見ていきましょう。

親鸞を慈円のもとに連れて行ったとされる伯父藤原範綱は後白河法皇の近臣で、特に親しく仕えていました。法皇は清盛の権勢拡大を嫌い、常にその勢力を抑える策略を巡らしていました。治承元年（一一七七）、法皇の意を受けた藤原成親・俊寛らが起こした鹿ヶ谷事件では範綱も平家方に捕まり、拷問の上、播磨国に流されています。帰京後は再び法皇のために熱心に働いています。その範綱が慈円に親鸞の戒師をお願いできるだろうか。因みに慈円もまだ二七歳と若く、まだ天台座主になったことはありません。最初に就任したのはそれから十一年後です。慈円自身も平家全盛のもとで天台座主就任を睨んだ動きをしなければならないのです。

慈円も親鸞も藤原氏という同族だから、慈円は戒師を引き受けるだろうという簡単な話ではありません。

親鸞のもう一人の伯父日野宗業は、親鸞出家の年の九月以降、兼実の絶大な支援を受けます。それはこのころの兼実の日記『玉葉』を見れば明らかです。兼実は宗業の学問的能力を絶賛しています。しかし「春比」（『親鸞伝絵』。この年の春は、一月・二月・閏二月・三月）にはすでに四〇歳ながらまだ修行中の身で、学者として立つ上での資格取得に懸命でした。とても親鸞の援助に回れる余裕も力もありません。もちろん、甥が出家するのを手伝えないほどまったく余裕がなかったわけではないでしょう。

親鸞が関東に到着したころ、範綱はかなり前に引退しておりました。実質上活躍していたのは宗業の方です。後鳥羽上皇の近臣で、上皇の大のお気に入りでした。いま主流になっている日野氏関係系図では、日野範綱が出家のために親鸞を慈円のもとに連れて行ってくれたことになっています。でも一つだけなのですが、実は宗業が連れて行ったという系図もあるのです。

しかし後鳥羽上皇が承久の乱で敗れて隠岐の島に流されてしまった時、宗業もともに没落した気配です。宗業の息子たちはかなり低い職にしか就くことができませんでした。範綱の息子たちよりもぐっと格下の職ばかりです。

事実はどうであったのかという追求をしなければなりませんが、少なくとも覚如はこの宗業が親鸞を出家させてくれたとは『親鸞伝絵』に書けなかったのではないか、と私は考えています。覚如は政治的な判断を優先しようと考える人物でした。

いずれにしても、『親鸞伝絵』になぜ「親鸞は慈円の下で出家した」と書いてあるのでしょうか。本連載では、いずれ私の考えるところを述べたいと思います。

①親鸞の出家と慈円

覚如の『親鸞伝絵』に、親鸞は九歳の時に伯父の日野範綱に付き添ってもらって慈円のもとで出家したとあります。慈円は後に天台座主の地位に四回も就任した人物です。天台座主とは比叡山延暦寺の住職で、同時に全国の天台宗のトップでもあります。また慈円は歴史書である『愚管抄』の執筆者であり、有名な歌人でもあります。そして右大臣から摂政へ、そして関白に昇った九条兼実の弟でもあります。親鸞はこのように有名な人物に戒師（出家させてくれる人）になってもらったのだ、というのが覚如の説くところです。

親鸞が出家した時、慈円はまだ二十七歳の青年でした。むろん、まだ天台座主の地位についてはいません。そしてまだ青蓮院の住職にもなっていません。俗に言う「青蓮院の慈円に戒師になってもらった」とするのは誤りです。『親鸞伝絵』にもそのようには書かれていません。親鸞はほんとうに慈円のもとで出家したのでしょうか。この問題の最終的な決着はまだついていません。

②慈円と九条兼実

兼実と慈円の父忠通は十人の息子のうち三人に摂政・関白に就任する資格を与えました。近衛基実・松殿基房・九条兼実の三人です。

母加賀局の父の職である「太皇太后宮」というのは、天王の祖母あるいは先々代の天王の皇后の庶務・家政を担当する役所です。「大進」とはそこを管理運営する役職の第三官です。位で貴族を承久貴族・中級貴族・下級貴族という三段階に分類すれば、正六位上から下級貴族になりますので、従六以上は下級貴族の上から三番目です。貴族社会では政治的・経済的にまったく問題にならない存在です。承久貴族の家に出入りさせてもらい、働き、なんらかのおこぼれに預かることを期待せざるを得ない境遇です。親鸞の父日野有範も、ほぼ同じ境遇の皇太后宮大進でした。「皇太后宮」は天皇の母または仙台の皇后の庶務・家政機関です。

兼実と慈円の母加賀局が「家の女房」であるというのは、『尊卑分脈』の記載です。「家の女房」とは貴族の家に勤める女性で、下働きではなく部屋を与えられて尊重される存在です。中級・下級貴族出身の女性が多いです。「加賀局」の「局」とは敬称です。主人の貴族と仲がよくｋなって子どもを生む例もよく見られます。兼実・慈円の母加賀局は、まさにそのような存在でした。

③自尊心が強かった兼実

母が上記のような卑賤な身分（貴族としては、ということです）出身であったためか、兼実は周囲から見下されまいとする自尊心が非常に強かった人です。当時、男子は母の身分を引き継ぐのではなく父の身分を引き継ぎます。兼実は従一位太政大臣であり、摂政であり関白であった藤原忠通の息子ですから、高位高官に昇ったからといって誰憚ることは必要無い立場です。しかし兼実と同じく父から後継者の立場を与えられた二人の兄基実と基房の母が正二位権中納言の娘であることと比較すれば、自分の母が従六位上相当の皇太后宮大進であることの差は歴然たるものがあります。母の実家からの政治的・経済的援助は期待できません。

兼実は摂関家の後継者としての自尊心が強く促されてでしょう、貴族が知っておくべき朝廷の慣例・法律・歴史を身につけることに励みました。兼実はそれらの学問的知識に非常に富んだ人として朝廷内で尊重されるようになりました。おりから勢力を伸ばしてきた平清盛とは仲がよくないのに、十五年間も右大臣として存在し続けることができたのは、この学問的知識が朝廷として必要であったｋらにほかならないでしょう。ただし、自尊心が強いゆえに大きな失敗に至ったこともあります。それは源頼朝が娘の大姫を後鳥羽上皇の後宮に入れたいと希望した時、断固、反対したことです。いくら関東の武家政権の長とはいえ、出身の身分は低く、朝廷の官職も低い頼朝の娘が後宮を希望することなどまったくあってしかるべきことではない、という理由からです。

兼実は頼朝の後押しによって、万年右大臣（正確には二十年もの在任でした）から摂政へ、摂政から関白へ昇ることができたのです。頼朝は、仕方がないので兼実の政敵土御門通親（源通親）と結ぶに至り、兼実は没落していったのです。

ここまでのお話で、九条兼実に対するイメージが崩れてきました。『鎌倉殿の十三人』でも性格が悪いキャスティングのようでした。

法然聖人の教えを聞き、『選択本願念仏集』を執筆することを進めた方と習ってきたのですが、そうとうの野心家のようですね。

来月は慈円さんの話も出ますが、本当に仲が良かったのかどうか？

稱讃寺　行事予定

二〇二二年　七月の行事予定



蝉（せみ）しぐれ　今日（きょう）一日（ひとひ）を惜（お）しみつ

二〇二二年「心のともしび」七月カレンダーより

「ウクライナ緊急支援募金」募集について

本願寺派では、ロシアの軍事侵攻により避難生活を余儀なくされているウクライナの人々を支援することを目的に、緊急に「たすけあい運動募金」において標記募金の募集を開始いたしました。
つきましては、募金にご協力いただきますよう、下記の通りお願い申しあげます。　合掌

記

1．募金の名称　　浄土真宗本願寺派　たすけあい運動募金
「ウクライナ緊急支援募金」

2．受付口座番号

〈郵便振替〉　０１０００－４－６９９５７
加入者名　たすけあい募金

〈銀行振込〉　銀行　ゆうちょ銀行
店名　一〇九（イチゼロキュウ）店
番号　当座　００６９９５７
名義　たすけあい募金

※通信欄に「ウクライナ緊急支援」とご記入ください。

編集後記（愚案）

この間、コロナ禍中の寺院活動状況のアンケート調査の結果報告が届きました。宗門の「宗勢基本調査」に基づき、大和総研さんが分析したものです。

稱讃寺の個別寺院診断シートでは次のように分析いただきました。

〈寺院運営基礎〉　Ａマイナス
〈人材〉　Ｃプラス
〈財務状況〉　Ｂマイナス
〈寺院活動〉　Ａ
〈門信徒との関わり〉　Ａプラス
〈情報受発信〉　Ｓ
〈環境変化への対応〉　Ａプラス
〈地域とのつながり〉　Ｂ
〈全体評価〉　Ｂプラス
（類似寺院内での評価　Ｂ）

でした。その中、〈人材〉と〈財務状況〉の評価は大変低いです。

〈地域とのつながり〉が以外と低いのですが、町会活動、民生委員活動を通して、全くというわけではありませんが、寺院活動に繋がっていないことを実感しております。いろんな方との交流がありながら、自身が活かし切れてなかったとも言えます。

地域のためと言うより、お寺に役立てようとしたことは、一種の〝現世利益〟を追求する手段と考えてきたことに誤りがあったのでしょうか